

## 論文内容要旨

論文題名 当科の大腸 ESD 困難症例に対する工夫による治療成績

掲載雑誌名 日本大腸検査学会雑誌 第 35 巻・第 1 号・27-38 頁・2018 年

専攻名 内科系内科学（消化器内科学分野）（昭和大学横浜市北部病院）石垣智之

### 内容要旨

大腸 ESD は 2012 年の保険収載以降，確立された手技となりつつあるが困難例は存在し，それらへの対処が全体の治療成績の向上につながる．大腸 ESD 困難例に対し安全かつ効率的に ESD を完遂するためには，症例に応じた工夫とストラテジーが重要となる．大腸 ESD の難易度が上がる要因の代表として粘膜下層の線維化が挙げられる．内視鏡治療前に線維化が想定される病変として癒痕症例と T1 癌が挙げられ，これらとその他の粘膜内病変に対する ESD との治療成績を比較検討した．昭和大学横浜市北部病院 消化器センターにて 2009 年 1 月から 2017 年 8 月の間，大腸上皮性腫瘍 1367 病変が ESD により切除された．そのうち，癒痕症例（腺腫～粘膜内癌）は 129 病変，T1 癌は 221 病変であり，その他の粘膜内病変（腺腫～粘膜内癌）は 1017 病変であった．「癒痕症例+T1 癌」vs「その他の粘膜内病変」の比較検討を行った結果，治療時間は前者で有意に長く，R0 切除率は後者で有意に高かった．穿孔率は前者で有意に高かったが，後出血率は両者間で有意差は無かった．偶発症に対しては全例で保存的に対処可能であった．困難症例ではある程度の治療成績の低下はあるものの，様々な手技の工夫により治療の quality を保っているものと考えられた．当院での大腸 ESD 困難例に対する工夫とストラテジーの提示を併せて行う．